

フィードバックを受け取る力とはどのようなものか ～日本語版フィードバックリテラシー行動尺度 (FLBS) の開発と内容分析～

What is a Literacy for Learners to Receive Feedback from Others Effectively? :

Development and Contents Analysis of a Japanese Version of the FLBS

天野 慧*,**

Kei AMANO

熊本大学大学院教授システム学専攻*

株式会社グロービス**

Graduate school of instructional systems, Kumamoto University*

GLOBIS Corporation**

＜あらまし＞ 学習者が実社会での問題解決により効果的に取り組んでいくためのスキルの一つとして、自分のアイデアや行動に対する他者からのフィードバックを受け取る力が挙げられる。本稿では、このスキルを評価する指標を開発するため、フィードバックリテラシー行動尺度 (FLBS) に着目し、日本語版を開発した。本稿ではこの開発プロセスについて報告する。また、この尺度の特徴を紹介し、フィードバックを受け取る力とはどのようなものかについて考察を加えた。

＜キーワード＞ フィードバック・リテラシー, FLBS 尺度, インストラクショナルデザイン

1. はじめに

学習者が自身の学びを高めるためのスキルの一つとしてフィードバックを受け取る力が挙げられる。特に、実社会に実際に存在する課題に学習者が取り組む問題解決学習では、唯一解が定まっていない。そのため、学習者は自分の主張に対し、多様な立場の他者からの異なるフィードバックを受け取りながら、アイデアを発展させていくというプロセスを繰り返すことが不可欠である。ここでの他者からのフィードバックは、時には相反するものであったり、学習者の本来の目的に沿っていなかったりする場合もあるので、学習者自身がフィードバックの妥当性や有効性を判断しながら、どれを採用するか適宜取捨選択できるよう、効果的にフィードバックを受け取る力を育成する必要がある。

従来のフィードバック研究では、それを提供する側の教師に着目したものが中心であったが、近年では学習者中心主義の立場から、受け取る側の学習者に着目したフィードバックリテラシー研究に注目が集まっており、その構成概念を明らかにするための尺度開発が欧米を中心に進められている (瀬崎ら 2023)。こうした尺度を活用すれば、学習者のフィードバックを受け取る力を評価できるようになることが期待される。

そこで本稿では、それらの尺度のうち、学習者

の行動に焦点を置いた尺度であるフィードバックリテラシー行動尺度 (Dawson *et al.* 2023) に着目し、その日本語版を開発することにした。

2. 日本語版 FLBS の開発

日本語版尺度の開発は表 1 の通りである。

表 1 日本語版 FLBS の開発プロセス

- | | |
|-----|---|
| (1) | 原著者から日本語版作成の承諾を得る |
| (2) | 高等教育、あるいはインストラクショナルデザインの専門家 3 名が独立して 24 項目から成る尺度の翻訳を実施 |
| (3) | 著者が (2) の訳文を統合し、ドラフトを作成 |
| (4) | 原著尺度を知らない第三者が独立して (3) の日本語の訳文を英語へバックトランスレーションを実施 |
| (5) | 原著者が (4) バックトランスレーション原稿をレビューし妥当性を確認 |
| (6) | 原著者の指摘を受け、6 項目について修正。そのうち、2 項目については再度バックトランスレーションを行い、最終的に原著者から日本語版への同意を得た |

以上を経て作成した日本語版 FLBS が表 1 である。この尺度において特徴的なのは、フィードバック内容の意味理解 (MS) だけではなく、それを積極的に求める意欲 (SF) や受け取った際の感情管理 (MA) といった要素を含め、多面的な要素を調整するプロセスとしてフィードバックを受け取るという営みを捉えていることである。

また、他者からより良いフィードバックを受け取るためには、そもそも他者にも良いフィードバックを提供する必要がある (PF) という互恵性もこの尺度では射程に入れられており、単にフィードバックを受け取るプロセスとして捉えるのではなく、より俯瞰的な相互コミュニケーションのプロセスとして捉えていることが推察された。

下和子氏、西勉ファビオ氏に感謝申し上げます。✉

3. まとめと今後の課題

本稿では日本語版 FLBS の開発のあらましを述べた。また、その内容分析を通じ、フィードバックを受け取るというプロセスが広範なコミュニケーションのプロセスであることを指摘した。

今後は日本の文脈における尺度の妥当性と信頼性の検証を行い、FLBS の改善に取り組む。また、この尺度を活用して、フィードバックを受け

取る力の育成にどう取り組むか検討したい。

謝辞

日本語版尺度作成にあたり、レビューにご協力いただいた FLBS 原著者の Phillip Dawson 氏、また、バックトランスレーションプロセスにおける訳文作成にご協力いただいた谷原英利氏、宮下和子氏、西勉ファビオ氏に感謝申し上げます。

参考文献

Dawson, P., Yan, Z., Lipnevich, A., Tai, J., Boud, D., and Mahoney, P. (2023) Measuring what learners do in feedback: the feedback literacy behaviour scale. *Assessment and Evaluation in Higher Education*, 1-15

瀬崎 颯斗, 渡邊 智也, 小野塚 若菜 (2023) フィードバック・リテラシーに関する研究動向. 日本教育工学会研究報告集 3, pp. 152-159

表1 日本語版フィードバックリテラシー行動尺度 (FLBS)

フィードバック情報の要請 (SF)	
☐	自分の成果物の質をじっくりと考え、成果物を改善するための情報源として活用する
☐	自分の成果物を改善するために、他の人が手掛けた成果物の好事例を探す
☐	他の人が自分の成果物に意見をしてくれるときには、じっくりと考えながら、それらを聴いたり読んだりする
☐	課題に取り組む時は、同様の課題で以前もらったコメントを参考にする
☐	自分の成果物に対して他の人からコメントを求める際には、曖昧な切り口でコメントを求めるのではなく特定の切り口でコメントを求める
情報の意味理解 (MS)	
☐	自分の成果物に対するコメントの内容を慎重に検討した上で、それを取り入れるかどうかを決める
☐	複数の人から相反するフィードバックを受けた際は、取り入れるべき意見とそうでない意見を自分で判断する
☐	コメントにどう対応していくかを決めるとき、その発信元の信憑性を考慮する
☐	コメントをもらうとき、それが成果物の質を評価する基準とどう関連しているかをよく考える
フィードバック情報の活用 (UF)	
☐	コメントに従って行動した後、自分の成果物がより良くなっているかを確認する
☐	自分の成果物に対するコメントを、質の高い成果物とはどのようなものを理解するために活用する
☐	コメントをもらった時、目の前の課題に対してだけではなく、今後の成果物をより良くするためにどう活用できそうかを考える
☐	過去の成果物に対するコメントは、将来また使えるように保管しておく
☐	他の人からコメントをもらったら、その時に自分が取り組んでいることを改善するために役立てる
フィードバック情報の提供 (PF)	
☐	他の人の成果物にコメントするときは、建設的な批判を行う
☐	頼まれたら、他の人の成果物にコメントする
☐	他の人の成果物にコメントする時、成果物の質を評価する基準に言及する
☐	私は仲間に進んでフィードバックをしようと申し出る
☐	他の人にフィードバックするときは、コメントが明確に伝わるように努める
感情の管理 (MA)	
☐	自分の成果物に対する正当な批判を受け入れることができる
☐	受けたフィードバックによって生じる否定的な感情にうまく対処できる
☐	フィードバックのメッセージが自分を苛立たせたり悩ませたりするものであっても、価値があれば、それを活用しようとする
☐	批判的なコメントは、自分の成果物を改善するための原動力として活用する
☐	たとえ受け入れ難いものであっても、批判的なコメントを活用する